

私、不運なんです!?

Sachiko & Takashi

あかし瑞穂

Mizubo Akaobi

termity



エタニティ文庫

目次

私、不運なんです!?

5

書き下ろし番外編
まだまだ私は、不運なのかもしれない

341

私、
不運なんです!?

一話 私、不運なんです

——私、寿幸子は——会社で『社内一不運な女』と呼ばれている。

元々、私のひいひいおじいちゃんが、祈祷師だかなんだからの一派で、そこで起こった跡目争いに巻き込まれて……呪いをかけられ、この『不運力』を授かった(?)と言われている。だから、寿家には、『不運な人間』がたまに生まれてくるのだとか。……つまり、私の『不運』は筋金入りなのだ。

思えば幼少の頃から、入園・入学、卒業時の集合写真で、隅っこの小さな枠に収まらなかった事はない。どんなに元氣でも、当日になると、発熱、嘔吐、下痢、インフルエンザで欠席……

好きな男の子の前ですっこけて膝小僧をすりむき、その手当てをしてくれた私の親友に、その男の子が一目惚れ……なんて事は、日常茶飯事。いつもちゃんとやっつてる宿題をたまたま忘れた日に、先生からあてられる事も、しょっちゅうだった。

中学入試は、遅刻しそうになり、焦ったせいで答えを書く欄が一つずつずれて、不合格。高校入試は、会場に向かう途中で事故渋滞に巻き込まれたけれど、ギリギリセーフで滑り込んだ。かと思ったら試験の途中でお腹が痛くなり、退席……不合格。そして、第一志望の大学入試は……やめよう。不毛な話だ。

第二志望の短大に進んだ後の就職も、難難難難を極め……数えきれないほどの会社に落ちた。不運体質の上に、おっちょこちょいな性格も兼ね備えている私は、緊張するとドジを踏んでしまう。就職活動でも、その能力を遺憾なく発揮し、何度も面接官の目を丸くさせた。

なんとか今のKM株式会社に入社できたのは、おじいちゃんの知り合いの知り合いが、KM社の誰かと知り合いだった、とかいうコネ(?)とも言えないような御縁があったから。

KM社は元々建築会社だったけれど、今では市街計画や百貨店改築等のコンセプトを提案する、中堅の総合建築コンサルティング企業だ。総務部や人事部といったスタッフ部門も充実してるから、そういう目立たない部署で縁の下の方の力持ちとして役に立ちたいと希望を出したのに……新人研修後に配属されたのは、男性社員の憧れ+美人で仕事がいっぱいできる女性社員が揃ってる、秘書室だった。挨拶の時、先輩秘書のおねーさま方の顔には『どうして、こんな子が秘書室につ!?』って書いてあったよね……はあ。

(配属先まで、不運……)

とはいえ、役員の方々が気さくなのは幸運だった。小柄な私は『娘か孫のようだ』と古参の役員さん達に飴をもらったりして、可愛がってもらっている。そんな役員さん達のためにも、会社に貢献できるよう一生懸命頑張ろう。そう思っているのに、やっぱり不運属性が発現し、ここぞという場面で誰かにおつかつて書類を撒き散らしたり……派手にやらかしてしまおう。

(そう、特に……)

——鋭い目付きの鉄仮面を思い出し、私は溜息をついた。あの人の前だと酷いんだよね、ドジが。苦手意識があるからか、自意識過剰なだけなのか……いつとも睨まれてくる気が……する。最近は何にかドジを踏むたびに、ぼかっと小突かれるようになってきた。そんな事する役員は彼しかない。なんなんだろう、あの人は。

(きつと、相性が悪いんだよね……うん)

鉄仮面の攻撃にもめげずに七年間、頑張つてなんとかここまで来たけれど……はあ。

明日は、一番仲が良い同期の女の子の結婚式。多分寿退職してしまう。これで何人目だろう……

当然ながら(?) 私に彼氏はいない。私の『不運』は、恋愛関係だとほぼ百パーセン

トの割合で発動する。いい雰囲気になっても、絶対に邪魔が入ってだめになるのだ。反対に、私の親しい友人は恋が成就する割合が高く……「幸子つて幸運のマスコットかも!」と言われた事もあったなあ。

「はあ……」

一人暮らしのアパートに、溜息だけが響く。私は気を取り直してクローゼットを開き、薄いクリーム色のワンピースを手にとった。

「これ着るの、何回目かなあ……」

ついでに、あと何回着るのかな。それで一体……

「……いつ、自分の結婚式ができるのかなあ」

好きな人もいない状態からじゃあ……まだまだだよええ。

私はまた、深い溜息をついた。

——自分の筋金入りの『不運』が、とんでもない悲劇を引き寄せようとしているとは、この時まるで気が付いていなかった。

二話 やっぱり、不運かもしれない

白いチャペル。色とりどりの薔薇の花がいっぱい飾られた、有名ホテルの披露宴会場。美男美女のカップルに、舞い散る紙吹雪。本当に、結婚情報誌のCMのワンシーンに出てきそうな光景だった。

「美恵子……おめ、でどう」

ぐしぐしと涙を拭きながら、なんとか祝福の言葉を贈った私に、白のウェディングドレスを身にまとった美恵子が困ったような笑顔を見せた。

「もう、幸子ったら……赤鼻のトナカイ状態になってるわよ」

「ぞ、そんな事……言われで、も」

同じ秘書室所属の村越美恵子。秘書にふさわしくない、と私に対して眉を顰める先輩秘書のおねーさまが多い中、「同期だから仲良くしてね？」と笑って言ってくれた彼女。大事な会議の資料を運ぶ途中で、『不運』を発動して書類を廊下に撒き散らした時、すぐに拾うのを手伝ってくれたのも彼女だった。先輩秘書から目をつけられる事が多い私

を、いつも庇ってくれていた。

本当に、今日の彼女は綺麗で、お姫様みたいで。今までの苦勞を知っているだけに、嬉しくて……そしてちよつと淋しくて、涙が止まらなかった。

「寿さんのおかげだよ。いろいろ美恵子の相談に乗ってくれて、ありがとう」

私は涙目のまま、美恵子の隣に立つ、背の高い男性を見上げた。美人の美恵子と並んでも遜色ない、白の婚礼衣装を身にまとった、麗しの王子様。

「専務……」

おおとりひみたか

——鳳裕貴。我が社の社長の二番目の息子で、専務。彼が美恵子に目を留めたのは、先の書類を拾い集める美恵子を、たまたま通りかかった専務が見たのがきっかけだった、と聞いている。

美形で人当たりがよく、仕事のできる社長令息。そりゃあモテないわけがない。私だって、ちよつと憧れてたところもあるし。だから、美恵子に対する女子社員からのバッシングは酷かった。

——ぼろぼろにされた靴。落書きされたロッカー。罵詈雑言のメール。美恵子が会社で泣きそうになっているところを何度も見た。

——どんどん顔色が悪くなつていく美恵子を、なんとか元氣付けようとしたけれど、あまり上手くないかず……おまけに、そんな時に限って私の『不運』が発動してしまった。

次の会議に提出する資料を完成させた直後に落雷に見舞われ、なんの因果かデータが消えてしまったのだ。しかも他の人のパソコンは、まったくの無傷だったらしい。

美恵子が手伝ってくれて、二人で残業して資料を作っていたら……なんとその時に、美恵子に嫌がらせしていた犯人が机に悪戯しようとしているところに出くわした。当時専務の専属秘書だった加藤さんが犯人だったなんて、思ってもみなかった。

『あなたなんか、なにもできないくせに！ 私はずっとずっと専務を支えてきたのよ！なのに、あなたなんか……っ！』

そう言っつて、美恵子に飛びかかろうとした加藤さん。それを止めるべく、二人の間に割って入った私は、勢い余って加藤さんにおつかり、そのまま加藤さんを巻き込んで、思いつきり派手にすつ転んでしまった。

その時に加藤さんが足首を酷く捻挫して数日休む羽目になって、そのまま会社に戻る事なく退職。その間に彼女がしていた、美恵子への数々の嫌がらせが公になった。

主犯格だった加藤さんがいなくなったせいも、他の嫌がらせも下火になり、美恵子の顔に笑みが戻った。

専務には「美恵子を守ってくれてありがとう」と感謝されたけど、正直複雑な思いだった。私の『不運』が役立つたつて……

「美恵子からよく聞かされたよ。辛い時、寿さんにとっても励まされたつて。それがな

かつたら、俺の事も諦めていたかもしれないつて……本当にありがとう」

そこまで言われると、なんだか恥ずかしいけれど……幸せそうな二人の姿に、私も思わず笑みがこぼれた。

「美恵子の事、よろしくお願ひします」

ぺこりと頭を下げた私に、専務は「ああ」と答え、その後、なにかを思い出したらしく、ぼん、と手を叩いた。

「そうだ、寿さん。また改めて話があると思うけれど」

「はい？」

私は優しい笑みを浮かべた専務を見上げた。専務はにっこりと笑いながら、大きな爆弾を一つ、私の頭上に投下した。

「兄貴が君を専属秘書に欲しいつて。だから、そのうち人事の話がくると思うよ？」

「……はあっ!？」

私の感動の涙は、どこかにすつ飛んだ。ぶわっと脳裏に浮かぶ、鉄仮面。あああ、兄貴つて……あの、兄貴ですかっ!？ もう一人、どこかに生き別れの兄貴がいるなんて事はないんですか、専務っ!？

「え、あの、私、そんな……」

戸惑いを隠せない私の背後から……地獄へと招くような、低い声が聞こえてきた。

「よもや断ろうなどと考えてるわけではないよな？ ……寿」

（ひいひいっ！）

顔を引き攣らせ、冷や汗をかきながら、そつと後ろを振り返ると、そこには……

「ふ、副社長……」

黒の礼服をびしっと着こなし、端正な顔に、それはそれは邪悪な笑みを浮かべた、長身の男性が立っていた。

ああ、親友の結婚式にまで、私の『不運』属性は健在なんだろうか……

（恨むわよおおお、ひいひいおじいちゃんっ！）

心の中で、『呪い』の元凶である高祖父に当たってみたものの、とつくの昔にご昇天された人に言っても仕方がない事だ。

私は、はああと重い溜息をついて、鋭い目付きの鉄仮面に向き直った。

——鳳貴史副社長、確か今年で三十四歳。社長の長男で専務の兄、だ。

いつも笑みを絶やさない専務と違って、副社長は無表情がデフォルト。美形の無表情って、能面みたいで非常に怖い。しかも鋭い目で、事あるごとに睨みつけられている私としては、是非とも関わり合いになりたくない相手、である。

（絶対、大口開けて笑ったら口元からひびが入って、ぴきぴき顔が割れるに決まってるわ、この人！）

私は、ほほほと引き攣った愛想笑いをしながら、無言の圧力をかけてくる副社長に言った。

「わ、私のような若輩者が副社長の専属秘書など、恐れ多くて。秘書室には他に、優秀で適任な人材がおりますから……」

「——決定事項だ。来週から引き継ぎに入る。準備しておけ」

うぐ。ばつさり切り捨てられたつ。二の句を継げない私をちら、と見下ろした後、副社長は専務の方を見た。その顔に笑みらしきものが見えて、私は目が点になる。

「良かったな、裕貴。美恵子さん、裕貴をよろしく願います」

あ、美恵子が頬を染めてる。専務はちよつとむつとしてる。

「はい……こちらこそ、よろしく願います」

副社長、こんな表情もできるんだ……とほんやり思っていた私の頬が、突然うにゅつ引つ張られた。

「痛っ！」

なにをするのよ、いきなりっ！ 右のほつべたを押しさえ、私は涙目で副社長を睨む。副社長の顔は、また無表情に戻っていた。

「お前、今、失礼な事を考えていただろう」

「そ、そんな事……っ」

なに言ってるの、いきなり人の頬つねる方が失礼じゃないっ!! そんな、私の心の叫びを察知したのか、副社長の右眉が上がった。

「お前がぼーっとしてる時に、口で言っても始まらない」

く、悔しい……っ！ けれど、当たっているだけに反論できないっ……!!

うぐぐぐと唸り声を上げる私に、にんまりと極悪な笑みを浮かべた副社長が言った。

「楽しみにしてるぞ？ お前の『不運』とやらを」

——ああ、やっぱり、私は『不運』なのかもしれない。

副社長の面白がるような視線に、私はまたもや深い溜息をついた。

三話 そもそも、始まりから

今にして思えば、副社長とは最初の出会いかからして最悪だった。

—— やっとこぎつけた就職最終面接の日。私は会社の一階玄関ロビーのど真ん中で、カエルのように床にのびていた。

早めに乗った電車の中。隣の人が青い顔をして、ふらふらしているのに気付いた。慌てて支えて、駅員さんに知らせ、それで電車が停止して遅れて。駅からバスに乗ろうとしたけれど、乗ったバスに不具合があったとかで途中で降ろされた。タクシーを捕まえたけど、交通事故で渋滞。仕方ないからその場で降り、残り三〇〇メートルほどを必死で走って、なんとか時間ぎりぎりにロビーに滑り込んだところで、派手にすっ転んだ。

「うう……痛たた……」

四つん這いの状態でふと前を見ると、ぴかぴかの高そうな革靴が。そのまま視線を上げていくと……いつまで経っても足!? 遥か上の方から、低い声が聞こえた。

「面接に来たのか？」

あ。郵送されてきた書類が散らばったままだった。

「す、すみませんっ!!」
 床に散らばった封筒やポーチを肩掛け鞆かばんに入れ、勢いよく立ち上がったら……
 「んきやつ!?!」
 今度は踵かかとがずるりと滑すべって、ひっくり返りそうに。そんな私の腰を、がしつと大きな手が掴つかんだ。見上げると、無表情な美形がじつと見下ろしていた。その視線に、どくんと心臓が鳴る。

「(ごう)、ごめんなさいっ!」

離れようと身を引いた私の足首に、ずきつと衝撃が走った。

「……っ!?!」

ぐらりと揺れた身体がまた、力強い腕に捕らわれる。すつと目を細めた男性は、黙ったまま私の右足を——パンストが破けて、膝ひざが丸出しになっている足を見た。

「えっ!?!」

次の瞬間、急に視界が高くなった。床がいつもより、ずつと遠いつ!?!

「あああああ、あのっ!?!」

男性が、ひよい、と私を左肩に担かついでいた。お姫様抱かかっこではない。いうなれば、米俵こめだわらだ。あああ、周りの人達が何事かと集まりだした。視線が痛いっ……!!

「その足、医務室で診みてもらえ。歩あきにくだらう」

私を担かついだまま平然と歩き始めた男性の背中をぼこぼこ叩たたきながら、私は焦あせって叫ぶ。
 「で、でもっ、面接の時間が……!!」

「……ああ、俺だ。今日の面接だが……」

スマホを耳から離し、男性が私に顔を向ける。男性の肩と背中に手を置いて顔を上げた私は近距離で見ると迫力な美形に、息を呑んだ。頬が熱くなる。

「お前、名前は？」

「こ、寿幸子、です……」

——一瞬、男性が固まった気がした。

「寿……?」

「は、はい……」

しばらく沈黙した後、男性はまたスマホを耳にあてる。

「今日これから、寿幸子という学生の面接予定が入っているだろう。怪我をしているよ
 うだから医務室に連れていく。面接の時間を遅らせておいてくれ」

「え」

私が目を丸くしていると、通話を終えた男性はスマホをまたポケットに入れ、ふたたび歩き始めた。

「あ、ありがとうございます」

「……」

周りが、ざわめいている。社員と思しき人達の、驚きの表情を見るのが恥ずかしくて、私は広い背中に顔を伏せた。そして、そのまま大人しく僕となつて担がれていったのだった。

「……え」

面接官が居並ぶ会議室で、私は目が点になった。

「寿幸子。短大卒の二十歳。……高校卒かと思っていた」

真正面に座り、じーっと書類を見ているその人は、医務室に私を運んだ後、さつさとその場を立ち去った彼だった。

「……専務、彼女がそうですか？」

彼の隣に座った、年配の男性が尋ねる。彼は、ああ、と答えて顔を上げ、真っ直ぐに私を見た。

——澄んだ漆黒の瞳。すつと鼻筋の通った顔は、やっぱりとても綺麗だった。

「KM株式会社専務、鳳貴史だ。……寿」

名前を呼ばれて、思わずびくっと身体が震える。そんな私に、専務はどこか面白がるような視線を向けてきた。そうそう、この時まで副社長は専務だったんだ。

「……で？ 何故さつきロビーの床に這いつくばっていたのか、ここで説明しろ」

朝、家を出てからの不運の数々を正直に話した私を見る面接官の方々の表情は、怪しむものばかりだった。……約一名を除いては。

「判った。で、志望動機だが……」

専務があまりにあっさり話を進めたので、逆に焦ってしまった。

「あ、あの……私の話、信じるんですか？ こんな突拍子もない……」

じろつと睨まれて、私は首を竦めた。ううう、へびに睨まれたカエルの気持ちか判る……つ。

「嘘をつくなら、もう少しまともな話をするだろう。お前の様子もぼろぼろだったしな。作り話をする余裕などなさそうに見えたが」

「は、い……」

専務がそう言うのと、周りの面接官も納得したような表情を浮かべた。助けられたのか、そうでないのか、よく判らない……

——その後は、ごくごく普通に面接が進み、私は「ありがとうございます」とお辞儀をして会議室を出るまで、なんとか冷静さを保つ事に成功した。

でも、外に出た途端に力が抜けて、溜息が出た。
 ああ、今回もだめなんだろうなあ。よりによってロビーですっこけて、会社の専務に担がれるなんて……鈍くさくて使えそうにない奴って思われたよね……
 私は肩を落とし、湿布を貼った足を引きずりながら、KM社を後にした。

——しかし数日後に届いたのは、採用通知だった。信じられなくて頬をつねったけれど、やっぱり痛かったので本物だと理解した。

私は実家である寿堂に戻り、採用通知を黒塗りの仏壇に供えて報告した。ちなみに寿堂は、私の祖父が営む和菓子屋である。

（お父さん、おばあちゃん……無事就職できました。見守っていてくれて、ありがとう。）

手を合わせて拝んでいると、私の横に藍色の作務衣を着たおじいちゃんが座った。おじいちゃんが右手に持っている赤い小皿の上には、見た事のない和菓子が載っている。繊細な細工の練り切り……

「あ、もしかして新作?」

「……ああ。幸一とあれにも食べて欲しいと思ってな」

私が横にずれると、おじいちゃんは座布団に座った。小皿をお供えして鈴を一回鳴ら

し、白髪頭を下げて手を合わせる。おじいちゃんはいつも、新作の和菓子ができるとお供えしてるよね。この練り切りも、そのうち寿堂のショーケースに並ぶんだろうな。

「良かったな、幸子。勤め先がやっと決まって、ほっとしただろう」

おじいちゃんが私の方を向いて微笑んだ。私は「うん」とうなずきつつも、首を傾げた。

「でも……なんでかよく判らないの。役員さんの前で、思いっ切り転んじゃったし……」
 「そりゃあ、わしの可愛い孫娘の魅力に気が付いたからに決まってるだろうが。お前を就職させるんだからな、その会社には感謝してもらいたいぐらいだぞ?」

「いや、それは身びいきつてもんで……」

こんなドジな人間、厄介者扱いされてもおかしくないんだけど。私がそう言うと、かからから、とおじいちゃんが高笑いをした。

「そのうち、嫌でも判る。あそこでお前を必要としている奴がいる、って事がな」

「そう……かな……」

くしゃくしゃと私の髪をかき回したおじいちゃんに、私もふふつと笑顔を向けた。

——で、入社してみたなら、まさかの秘書室配属だった、と。

秘書室って、いわゆる女性のエリート、社内の高嶺の花が揃ってる部署じゃないの!?

そこに、ちんちくりんな私が紛れ込んでもいいの!? 辞令をもらった時の衝撃は、七年経った今でも忘れられない。

先輩秘書の方々の目は、当然のごとく冷たかった。でも、そんな中で唯一、私にふわっと微笑んでくれた女性がいた。

『……私、村越美恵子。同期になるのね、よろしく』

優しい笑顔。すらりと背が高く、モデルみたいな美人。同期だけど、先輩みたいに感じた。

『私、寿幸子。こちらこそ、よろしく!』

私もにっこり笑って、美恵子の手をしっかりと握った。

* * *

「うーん……もぐもぐ……はあ」

竹の菓子切りで鶯色の練り切りを切り、口に運ぶ。ほんのりとした甘さが、口の中に広がった。さすが、おじいちゃんの和菓子。心が和むなあ……

「なに唸ってるんだよ、姉貴」

過去の回想を遮る声に、私は顔を上げる。ことん、と目の前のこたつテーブルに、薄

緑色の湯呑みが置かれた。緑茶のいい香りが鼻をくすぐる。

「ありがと、幸人」

紺色チェック柄のバジヤマを着た幸人が、私の前にどかっと座り、手に持っていた紺色のマグカップに口をつけた。私も湯呑みを両手で持ち、温かいお茶を一口飲む。お茶独特の柔らかな苦みが和菓子の甘みと調和して、なんとも言えない美味しさだ。

「美味しい」

幸人って、本当よく気が利くわよねえ……私は、まじまじと目の前の弟を見た。幸人は二歳年下で、身長は百八十二、私より三十センチ高い。すつと鼻筋を通った和風イケメンだ。一緒に歩いていても、私が年上に見られる事は、ほぼ百パーセントない。姉の威厳はどこ行った。

「で? なにがあつたんだよ?」

私が目丸くすると、はあ、と幸人が溜息をついた。

「姉貴が実家に戻ってくる時って大抵、なんかドジ踏んだか、悩んでる時だろ? さつきから、こたつに潜って、うんうん唸ってるしさ。ほら、さつきと話せよ」

「……うう」

(バレてる……)

——落ち込んでる時には、おじいちゃんの和菓子を食べる。それが一番、元気が出

る方法。だから、嫌な事があった時やドジした後は、ここ寿堂に戻る事が多い。渋めのお茶を飲みながら、優しい甘さの和菓子に舌鼓を打つ。それだけで、また明日も頑張ろうって思えるから。

隠そうとしても、いつとも幸人にはバレるのよねえ……悩みがあるって。私も溜息をつき、幸人に美恵子の結婚式で聞いた話をした。

「でね、来週から……副社長付きになりそうで……ううう」

ぐてつと、こたつテーブルに頭を載せた私に、幸人が眉を擡めて言った。

「その副社長って、どんな奴？」

「長身美形な鉄仮面」

きっぱり言い切った私に、「なんだ、それ」と幸人が突っ込んだ。

「だって……私が失敗してるところに、必ずと言っていいほど居合わせるのよ!? そのたびに睨まれて……っ」

思わずぐつと拳に力が入る。そりゃ、あちこちでぶつかったり、転んだりしてるけど！ でも、幸人以上に長身な副社長に見下ろされる、ちんくしゃな私の気持ちにもなってるから。威圧感、ハンパじゃないんだから！

「仕事ができて、社長の息子だからモテるし……秘書室で総スカンくらいそう……」

はあああ、と溜息をつく私の頭を、幸人がぼんぼん、と軽く叩いた。

「きつと大丈夫だろ。ああ、今度新作作るからさ、また食いに戻ってこいよ。姉貴に食べて欲しいから」

成績優秀で東大にだって行ける、と言われてた幸人は、高校卒業後あっさりとおじいちゃんの弟子になり、和菓子職人の道に入った。「元々寿堂を継ぐ予定なんだから、早い方がいいだろ」って言ってる。もったいないって私は言ったけど、幸人は「やりたい事やってるから」と意に介さずだった。

「うん……ありがと、幸人」

幸人の方が、お兄ちゃんみたいだよね……小さい頃は、すごく可愛くて女の子みたいだったのに。

「私のスカート穿いたら、すんごい似合ってる『寿堂に美少女がキター』って評判になった幸人が、大きくなったねえ……」

私がいじめる言くと、幸人の頬骨あたりがぱつと赤くなった。

「……っ、無理矢理着せておいてなに言ってるんだよ!? そんな黒歴史は記憶から消せっ！」

「えーっ、可愛かったのに！ ほら、おかーさんだって褒めてたじゃない。『シンデレラみたいね、幸人』って」

「あの人の感性は人と違うだろうがっ!!」
 そんなに大声で叫ばなくても。今だって女装したら、きっと私より美人だよ、幸人。
 でかいけど。

「……そう言えば、おかーさん、どうしてるかなあ……最近、顔見てないし」
 私と全然似てないおかーさんは、一言では言い表せない人物だ。お父さん亡き後、アメリカ人と再婚し、そのまま世界中を飛び回っている。今どこにいるのかさえ、不明だ。すると幸人が、ぼそっとつぶやく。

「昨日、ジャックからメール来てた。二人でどっかの奥地にいららしいぞ」

「……なんかまた、怪しあやそうだな……」

余計なトラブル引き起こすからなあ、おかーさんは。まあ、頼れる旦那さんのジャックが一緒なら安心だけど。それなら当分日本には帰ってこないかな。

私はふと仏壇の方に顔を向けた。

「……幸人って、お父さんに似てきたよね」

写真の中で笑うお父さんの顔は、目の前の弟によく似てて。幸人の方が、お父さんの本当の子供みたい。

すると、幸人がすつと目を細めた。

「なんだよ、突然。そりゃ伯父おじと甥おなの関係なんだから、似るだろ多少は」

お父さんは優しい声と大きな手の持ち主で、いつも笑顔で見守ってくれていた。私が小学校に上がる前に病気で亡くなって、すごく悲しくて。涙も出なくなつた私の前に現れたのが、幸人だった。

将来の寿堂の後継者になって、従弟いしこ——三人兄弟の末っ子だった幸人が、私の『弟』になつてくれた。お父さんの弟である孝造こうぞう叔父さんが、一人っ子だった私の事を心配してそうしてくれたんだって知つたのは、ずいぶん後の事だったけれど。

「あの時、幸人が弟になつてくれて、とても嬉しかったよ。ありがと、幸人」

私がそう言うと、一瞬、幸人の目が光つた気がした。

「……ほら、さつさと飲めよ。明日も会社なんだろ？」

「……うん」

私は弟に、につこりと笑いかけ、また湯呑みに口をつけた。

四話 専属秘書に、なりました

「聞いたわよ、異動の話。一体どういう事、寿さん!？」

「……私にも判りません。副社長にお聞き下さい」

朝っぱらから目を吊り上げた秘書室の面々に迫られて、私はげんなりしながら答えた。机の上で書類の整理をしている手は止めなかったけど。

「んまっ、一番できそこないの秘書のくせに、生意気なっ!!」

私は一番いきり立っている二年先輩の佐々木真由香に目を向けた。軽いウエーブのかった黒髪に、つんとした表情。いつ見てもペルシヤ猫を思い出すような美人だ。確か、あの加藤さんと同期で、なにかと競い合ってた仲、だと聞いている。

「突然言われたので本当に、私はなにも知らないんです。……ですから、詳しくは副社長に」

——と言った瞬間、佐々木さんの手が動いた。ぱしっという音と共に、書類があたりに散る。

「せいせい媚でも売って、恥をかくがいいわ。どうせ副社長の気まぐれでしょうから……『社内一不運な女』が、どんなものだから試したいんだわ、きつと。『社内一強運の男』って有名な副社長の事だから」

「……」

『強運の男』って通り名も、イタイわよねえ……私は心の中で溜息をつき、床に落ちた書類を拾い始めた。

「まあまあ、佐々木さん。どうせ、この子の事だから、なにかやらかして即お役御免になるわよ」

……はい、それを切に願ってますが。

「そうよ、副社長の専属秘書が一番ふさわしいのは、主任である佐々木さんですもの」
秘書室所属の一般秘書が、各部署の部長や専属秘書の手伝いを持ち回りで行っているのに対し、専属秘書は特定の役員直属の秘書だ。役員側から能力を見込まれて引き立てられる事が多く、秘書の中でもエリート扱いされている。だから、みそっかすの私が取り立てられたとなったら、皆様のプライドは傷付くわよねえ……

「えっと……あと一枚……」

入り口付近まで飛ばされた書類を拾っていた私の視界に、ぴかぴかに磨かれた黒の革靴が入ってきた。

「なに、床に這いつくばってるんだ？ 寿」

頭の上から落ちてきた呆れたような声に、私は顔を上げた。

「は、い？」

じっとこちらを見下ろす鋭い視線。慌てて立ち上がろうとして、右のヒールがずると滑った。

「きゃ……!」

「尻餅をつきそうになった私の腰に、がしっと力強い腕が回された。そのままぐいっと身体を引き寄せられて、副社長の広い胸に、もたれかかる格好になる!？」

「相変わらずだな、お前は。もっと足元を確認しろ」
「ははははは、はいっ!」

「はーなーしーてーっ!! 胸に片手を当てて、距離を取ろうとしても何故か放してくれない。スーッと越しに温もりを感じ、いたたまれない気持ちになる。秘書の皆さまから、殺気がめらめらと立ち上っているのを感じ、背筋がぞぞっと寒くなった。」

「……失礼ですが、副社長。寿さんが副社長の専属秘書になるというお話は本当でしょうか?」

「一歩前に出て、にっこりと微笑む佐々木さんに副社長が向き直る。ようやく解放された私は、一、二歩後ろに下がって距離を置いた。」

「ああ。さっそく今日から副社長室に来てもらう。秘書室の君達には、迷惑をかける事になるが、こちらでも急ぎだね」

「ひくり、と佐々木さんの口元が引き攣った。だから言ったじゃない、私の意思じゃないって。こほん、と咳払いをした佐々木さんが、改めて副社長を問い質す。」

「その、本当に、寿さんで間違いございませんの? 少々言いづらいのですが……彼女の能力では、専属秘書など……」

「佐々木さんはわざとらしく、私に憐れむような視線を送ってくる。ちよつとそれ、うつつうしいんですが。私はふう、と溜息をつき、自分の席に戻ろうとした。」

「がし。」
「へ?」

「なんですか、この左腕をがちり掴んでいる手は!? 思わず振り払おうとした瞬間、ぐいっと引つ張られた。」

「あ、あの!？」
「どうして、副社長の右隣にいるんですか、私!? しかもホールドされた左腕が痛いんですけど!? 体格差あるんですから、力加減して下さいよ!!」

「寿、という名の秘書が他にいるのか?」

「副社長の冷たく低い声が秘書室に響いた。佐々木さんは一瞬言葉に詰まったが、持ち直して答える。」

「いいえ、寿さんは一人しか」

「なら、こいつだ。間違いないから、さっさと準備させるように。ああ、それから」
「口元だけ微笑んだ副社長のオーラが黒かった。」

「こいつはもう、俺の管理下にある。余計な手出しはするな」
「びき、と秘書室全体に、ひびが入った音がした。」

「て、手出しだなんて、そんな……ほほほ」
 青い顔で誤魔化す佐々木さんをじろりと睨んだ副社長が、そのまま私を睨みつける。
 「さっさと支度しろ。三十分後に副社長室に来い。鹿波に連絡してある」
 「……はい、判りました」

しぶしぶ返事をする、さらに副社長のオーラが黒さを増した。
 「逃げたら承知しないからな。判ったか?」

あまりの気迫に圧倒され、思わずこくこくと首を縦に振ってしまった私だった。

恐る恐る訪れた副社長室隣の専属秘書室では、にこにこ感じのよい五十代後半ぐらいの女性が私を出迎えてくれた。ゆるいパーマに丸眼鏡をかけた姿は、まるでアメリカのカントリードラマに出てくる、ふくよかで人のいいおばさんみだった。

「あら、あなたが寿さんね。私、副社長専属秘書の鹿波雅子です。まあまあ、噂通り可愛らしいお嬢さんだこと!」

「こ、寿幸子です。よろしくお願いします」

う、噂ってなんですか!? しかも可愛らしいって!? 聞き慣れないセリフに、頬が熱くなるのを感じる。私と同じくらい小柄な鹿波さんは、ふふふと優しく笑った。

「副社長、とても心配していらしたのよ? ほら、突然の引き抜きでここへ配属になっ

たでしょう? 秘書室でなにか言われたりしてないかって」

「……え」

私は鹿波さんをまじまじと見てしまった。嘘を言っているような感じではない。いや、でも。

(あの副社長が……私の事を心配?)

大体さっきだって、私を思い切り睨んでなかったっけ!? あれが心配してる人の態度なのだろうか。いや、とてもそうは思えない。

(きつと鹿波さん、拡大解釈してるのよね……)

確か社長の古くからの知り合いで、副社長や専務を子供の頃から知ってるって聞いた事がある。鹿波さんにとっては、あんな副社長でも子供みたいに可愛く見えてるんだろ
 う、きつと。

紺色のスーツ姿の彼女の背筋はびしっと伸びている。親しみやすくおっとりしたタイプに見えるけれど、鹿波さんは気難しい副社長のフォローを一手に引き受けている、凄腕の秘書だ。

鹿波さんは、にこにこ話を続ける。

「私も、もうじき定年でしょう? だからそろそろ仕事を引き継がないといけないの。でも……」

はあ、と重い溜息が鹿波さんの口から洩れた。

「なかなか適材がいなくて。副社長は仕事に厳しいし……自分に色目を使う秘書なんていらんっておっしゃるし。その条件を満たす秘書って、あなたしかいなかったのよ、寿さん」

私は目を丸くした。条件を満たす……って。

「で、でも……その、鹿波さんもご存知の通り、私はよく皆さんにご迷惑をかけてて……」

「あら、寿さんが携わった案件って、皆成功してるのよ？ それに、あなたは勤務態度も真面目で誠実だわ。おまけに……」

くすくす笑う鹿波さんは、とても可愛らしい。

「あの副社長になびかない秘書、ですものね。とても貴重な人材だわ、あなたは」

「は、あ……」

なびくもなびかないも……。いつもいつも、なにかと睨みつけられてるこの状況では、なびきようがないというか。うーんと考え込んだ私を見て、あらあら、と鹿波さんがつぶやく。

「意外と不器用なのね」

「意外なものも、私の不器用さは有名で……」

きよとんと鹿波さんを見る私に、彼女はぶつと噴き出した。

「まあ、いいわ。私が口出しする事でもないしね……では」

鹿波さんの表情が、きりりとした敏腕秘書のものに変わる。

「今から業務内容を説明するわね。荷物はこの机に置いて、こちらに来て頂戴」

「はい！」

私は指示された通りに荷物を置き、メモとペンを取り出して、鹿波さんの傍に行った。

「まず、この副社長の秘書室の説明をするわね」

通常、役員の専用部屋は一つで、秘書と同室になるけど、社長と副社長だけは、秘書専用の部屋があるんだよね。鹿波さんは入り口の右側に二つ並ぶ机を指差した。机の上には、書類を置くB4サイズの赤い箱と黒いノートパソコンが置かれていた。入り口に近い方が、私の席らしい。

「こちらが、私達専属秘書の席ね。机の隣にある棚に、各部署から依頼がきた書類を入れてもらうの」

机の奥には、コートも掛けられるロッカーが二つ。よくある灰色じゃなくて、木目っぽい模様になってる。そういえば、この部屋自体も濃いめの色合いの木目調だね。高級感溢れる……

窓際には白いテーブルとモスグリーンの二人掛けのソファが置かれ「こちらで、副社長の仕事が終わるのを待っていたんだけど事もあるのよ」と鹿波さんが説明してくれた。入り口の左側には小さなカウンターがあつて、その上のコーヒーマーカーがこぼこぼいつている。その後ろの壁には、これまた木目調の食器棚とミニキッチン。

「お客様がいらして飲み物を出す時は、カウンターの後ろの食器棚のものを使つてね。副社長はコーヒーマーカーから、コーヒーマーカーは切らさないように。お客様によつては、紅茶や日本茶を望まれる方もいるから、各種茶葉も食器棚に入つてるわ」

「はい」

……で。秘書机の正面、キッチンコーナー横の壁の中央に、重厚な造りの扉がある。ここが副社長室への扉だよな。

「今、副社長は外出されているけれど、室内を見てもいいと許可をいただいているから」
 がちやちや、と鹿波さんが金色のドアノブを回した。重そうな扉が、ゆっくりと開く。鹿波さんに続いて、私は初めて副社長室に足を踏み入れた。

「うわ……」

思わず声が洩れた。濃い茶色で重厚感のある部屋。ドアの正面奥にでんと鎮座しているのが、副社長の机だよな。艶やかでどっしりした印象の机に、黒の革張りの椅子。机の上は綺麗に整頓されていて、多分処理中と思われる書類も、いくつかに分類されて縦

置きの箱に入っていた。

鹿波さんが悪戯っぽく言う。

「副社長はご自身で整理整頓される方だから、私が机を片づけるという事はほとんどないわ。……社長はお仕事中、書類の山が次々できて、よく雪崩を起こしていたけれどね」

そうか、鹿波さんは、元々社長秘書だつて。副社長が専務から昇進した時に、副社長付きになつたんだつた。

机の後ろの壁に、備え付けっぽいクローゼットとガラス戸付きの本棚。本棚には、フイルがぎっしりと並んでいた。部屋の中央の応接セットも、黒の革張りソファで高級そうだなあ……さすが副社長室。入り口の右手にある窓からは、高層ビル群が見える。グリーン地に茶色の模様のカートンも、高級感が漂う。窓際に置かれた、幹がぐねぐねと編まれたパキラの葉は、濃い緑色で元氣そうだった。

「観葉植物の水やりも、忘れないでね。朝出社したら、副社長室と秘書室を簡単にお掃除するついでにやっているの」

窓の反対側にある、副社長室から直接廊下に出るドアは普段使われてないんだとか。必ず秘書を通してから面会、つて事よね。

(……あ)

ふと思いついて、私は鹿波さんに言ってみた。

「あ、あの鹿波さん。その掃除、私にさせていただけませんか？」

「まあ、寿さんが？」

鹿波さんが目を丸くする。私は「ええ」とうなずいた。

「まだまだ業務を私一人でこなすのは難しいと思いますが、お掃除ならできますから！秘書室でも掃除係でしたし！」

鹿波さんは私の目をじっと見た後、くすりと笑った。

「そう。それだったら、お願いしようかしら。じゃあ、掃除道具の場所を説明するわ」

「はい！」

（よし！ 頑張ろう！）

私と鹿波さんは、ふたたび副社長専属秘書室へと戻っていった。

鹿波さんによる懇切丁寧な業務説明が一通り終わった後、まだ残っていた業務をこなすために私は秘書室へと逆戻り。針のムシロの上で作業して、やっと帰れる〜と一階玄関ロビーに降りたら……

「あれ？」

帰宅する女子社員がちらちら見てる、背の高い、綿のジャケットにジーンズ姿の男性

は——

「幸人？」

呼びかけると、ガラスの自動ドア近くに立っていた幸人が私の方を向いた。てててと駆け寄る私を、幸人はじっと見ている。弟は姉の私が言うのもなんだけど、かっこ良かった。足長いよね〜こうやって見ると。

「どうしたの？」

「ああ、姉貴が上手くやってるか、ちょっと気になって」

……あ。私が愚痴こぼしたから、気にしてくれてたんだ。私はにっこりと笑って言った。

「ありがと、幸人。うん、大丈夫……なんとかなりそうだよ」

鹿波さんは親切だったし。副社長は相変わらず鉄仮面で、じろりと睨まれたけど。でも、どやされる事なく今日は終わったし。

「今日、実家に戻ってこいよ。姉貴の好物、こしらえてやるから」

「え、本当！」

幸人は、お料理が抜群に上手なのだ。絶対に、いいお婿さんになると思う。うわー、なににしようと思つたら、背筋がぶわっと寒くなった。

「寿？」

私の背後に視線をやった幸人の表情が、さっと硬くなる。恐る恐る振り向くと、トレンチコートを着て、黒いビジネスバッグを持った長身の鉄仮面が、そこにいた。
(うわわわっ！)

眼光鋭いっ！ な、なんか……機嫌悪そう？ 副社長の背後から立ち上るダークオーラに、思わずぶるっと身体が震えた。

「ふ、副社長……お疲れ様です」

どもりながらもお辞儀をした私をじろり、と睨んだ副社長の視線は、そのまま隣の幸人に移った。幸人も目付きが鋭くて、なんかいつもと違う……？

(ななな、なんでこの二人、睨みあってるのーっ！)

……コワイ。長身の美形同士が睨みあってるのって、とつても怖いっ！ プリザードが吹き荒れるこの状況を打破しようと、私は慌てて言葉を継いだ。

「あ、あの……私の弟です。幸人、こちらは鳳副社長。私の上司よ」

幸人が息を呑み、副社長は一瞬、目を見開いた。

「弟……？」

「鳳……副社長？」

幸人はほんの少し間を置いた後、抑揚のない口調で言った。

「義理の弟の寿幸人です。姉がいつもお世話になっております」

深々とお辞儀した幸人を見る副社長の顔は、なんだか引き攣っているような気がした。私が童顔だから、姉弟に見えないんだ、きつと。

「鳳貴史だ。こちらこそお姉さんには、いつも世話になっている」
会釈した後、副社長が私を見下ろして言った。

「明日から、頼んだぞ。鹿波の手助けをしてやって欲しい」

「はい、判りました。では、お先に失礼致します」

ぺこりともう一度頭を下げ、幸人と一緒に自動ドアをくぐった。背中に、焼けつくような視線を感じながら……
(怖くて、振り返れない……)

きつと、あれだ。振り返ったら、石になるんだ。幸人の左腕をぎゅっと掴んだまま、私は足早にその場を離れた。

「さっきの男が、姉貴が言ってた……」

幸人がぼそっとつぶやく。私は幸人を見上げ、「うん……」とうなずいた。
「仕事ができで、凄いなんだけど……なんか、苦手なのよね。ずっと睨んでくるし……」

それにしても副社長は、なんであそこにいたんだろう。車通勤しているそうだから、副社長室から地下の駐車場に直行した方が早いのに。ぶつぶつと文句を言っていた私は、幸人の様子がおかしい事に気が付いた。

「幸人？ どうしたの？」

正面を向いたままの幸人は、険しい表情で、どこか遠い目をしていた。

「あいつ……」

「幸人ってば！」

はっとしたように、幸人が私の方を見た。もう幸人の雰囲気はいつも通りに戻っていて、私はほっと溜息をついた。

「……幸人も疲れてるんじゃないの？ 新作作りで無理してない？」

幸人がふっと微笑み、ぐしゃぐしゃと私の頭をかき回した。「もう！」と抗議すると、幸人はからからと笑って言う。

「俺は大丈夫……ほら、行くぞ」

「う、うん」

急に大股歩きになった幸人にあわせて、小走りで後を追いかけた私はその時、副社長の視線がずっと私達を追いかけていた事に、気が付かなかった。

五話 同期と、不運と、唇と？

「んーっと……拭き残しは、ないよね？」

翌朝、副社長の机を拭き終わった私は、きよろきよろと辺りを見回した。テーブルと黒の革張りソファも綺麗になったし、床にゴミも落ちてない。パキラにも水をやったし……後は、ポットのお湯を確認して、モーニングコーヒーの準備かしら。

私は副社長室を出て、秘書室のカウンター奥にあるミニキッチンへと向かう。さっきセットした湯沸かしポットは、もう沸騰済みになっていた。コーヒーとフィルターは戸棚の中だったよね。コーヒーマーカーに水を入れ、コーヒード豆をセットする。電源を入れると、やや耳につく音と共に、豆が挽かれていく。

ふわんといいい香りが、秘書室に漂う。うん、いい豆だね。さすが副社長用……。こぼこぼとドリツプ音が響く中、少しだけ休憩。ちよつとカウンターにもたれながら、壁掛け時計を見上げる。時刻は八時半。もうそろそろ副社長が来る頃だね……

入り口の右横の壁にある姿見で、身だしなみを確認した。紺色の上着にタイトスカート、ボウタイ付きの白いブラウス、という絵に描いたような模範的女子社員の姿、だ。

髪はくるまでは長くないから、内巻きにぐるんとしてみた。これが、私にできる精一杯のオシャレだった。

(佐々木さんみたいな、縦ロールは無理だよねえ……)

すらりとモデルみたいな体形。お嬢様っぽい巻き髪。着ているスーツは、いつつもブランド物。細いヒールのパンプスを履いて颯爽と歩く姿は、秘書室のシンボルになっていた。私には、ああいう色気は到底出せない。もつとも、色気は求められてないみたいだから、安心だけど。副社長になびかない秘書、というのが人選の最重要項目だったみたいだし。鏡の中の私と顔を見あわせて、ふう、と溜息をついた。

「指名されたんだから、仕方ないよね……」

——とりあえず、私にできる事をやろう。うん。

朝一番に出社して、副社長室の掃除をするのは結構気持ち良かった。いくら不運体質でここでの仕事に慣れてなくても、まだそれほど大きな失敗はしようがないから役に立ってるし。鹿波さんには一人で大丈夫です、と言って、今日はゆつくり出勤してもらう事にした。

(社長の秘書だった時から、ずっとこの時間に出勤していたなんて凄いやね、鹿波さん……)

独り身でお気楽だから続いたの、って笑いながら言っていたけれど、強い意思がなく

ては、続けられないと思う。

そんな事を考えていたら、ピーツと音が鳴った。あ、コーヒーができたみたい。ちゃんとできてるか、味見してみようつと。

白いコーヒークップを戸棚から取り出し、挽きたてのコーヒーがみなみと入ったガラスのサーバーを外して、深みのある色のコーヒーをカップに注ぐ。

「うわ、いい匂い」

両手でカップを持ち、立ち上る香りをんーっと鼻から吸い込んでから一口飲んでみる。嫌な苦みもないし、酸味も少なめ。コクがあって、まるやかだ。甘めにして飲んだら美味しそう。今度生クリームを載せて、ウインナコーヒーにしてみようかな……

「おはよう」

「ぶっ!!」

私は、げほげほと咳き込んだ。こ、こぼさずに済んだ……動揺しながらもなんとかカウンターにカップを置き、涙目で振り返ると……うげ。

——本日も、ホワイトグレーのトレンチコートと、その下にびしっと高級スーツを着た副社長が立っていた。今日みたいな濃いめのブラウンっぽいスーツも似合う。顔がいろいろ得だなあ……というか、全然気配を感じなかったんですけど!? 恐ですか、あ

あなたは!?

「あれ? でも、機嫌は良さそう? だよね……」

「お、おはよう……ございます」

少なくとも、昨日みたいな不機嫌さはなさそう。ぺこりと下げていた頭を上げると、副社長は辺りを見回していた。

「鹿波は? 来てないのか?」

あ、そうか。鹿波さんがこの時間にはいないなんて、珍しいよね。

「あ、あの……朝の準備でしたら、私一人で充分ですから。鹿波さんは定時にいらっしやいます」

「……」

しばらくじっと私を見下ろしていた副社長は、くると背中を向けた。

「コートを頼む」

「は、はい」

私は背伸びして、副社長の肩からコートを脱がせる。これ、どこに掛けるんだろうと思っていたら、副社長がぼつりと言った。

「部屋の中にクローゼットがあるから、そこに掛けてくれ。それから……」

カウンター上のカップに、彼の視線が移動した。

「俺にもコーヒーを頼む」

「は、はいっ」

大きなコートを手に持ったまま、私は副社長室に入っていく彼の背中を追いかけた。

（うわ……高そう）

副社長室に備え付けられているクローゼットの中には、礼服を始め何着かスーツが掛かっていた。ネクタイも……有名ブランド物ばかり。ほこりを落としたコートをハンガーに掛け、クローゼットに仕舞う。

「……」

う……背中に突き刺さる視線が痛いっ……! 私を射殺す気ですかっ……! クローゼットをばたんと閉めて振り返ると、何を考えているのか読めない瞳にぶつかつた。

副社長は、応接用のソファにすっと座り、茶色の紙袋をテーブルの上に置く。その紙袋に印刷されている王冠のロゴを見て、私はあつと声を上げた。

「……*Carte du bonheur!*」

副社長が右眉を上げた。

「知ってるのか」

「当たり前ですっ! 売り切れ必至の人気店ですよ!? ここのパイやタルト、絶品

で……！」

以前、お客さんからの頂き物を、仲良しな同期の小田原くんがおすそ分けしてくれたんだよね。一度しか食べた事ないけれど、本当に美味しかった！ 心の中で涎を垂らしながら、紙袋に釘付けな私を見て、副社長が苦笑した。

「ほら」

え。私は目を丸くした。副社長は紙袋を私の方に差し出している。

「コーヒー飲みかけだっただろう。これも一緒に食べる」

「えっ!? よ、よろしいんですかっ!?」

びっくりして叫ぶと、副社長の目が優しくなった。うっ……思わず頬が熱くなる。み、見慣れないものを見た……

「このケーキを土産にもらった時、喜んでばくばく食べたんだろ、お前。小田原からそう聞いた」

小田原くん、なに言ってると思った私に、副社長が言葉を継いだ。

「初日だからな。これで少し息を抜け」

……気を遣ってくれてたんだ。鹿波さんが言ってた通りだった。ちよつとの間、ほーつとしてしまったけれど、なんだかくすぐったくて、そして嬉しい。

思わず笑顔になる。

「は、はい！ ありがとうございます！ このご恩は必ず！」

紙袋を受け取った私は、口元を綻ばせたままお礼を言った。副社長が、わずかに目を見張る。

「コーヒー、入れてきますね」

ぺこりとお辞儀をし、軽い足取りで副社長室を出て行く私には、背後の副社長の様子は判らなかつた。

* * *

「えーつと……後は営業部と、企画部に確認に行けばいいわよね」

——寿さん。午後からの会議の資料を提出していない部署があるの。もう時間がな
いから催促しに行くってくれる？

始業して間もなく鹿波さんの依頼を受けて、私はいくつかの部署を回っていた。もう
できあがっていた部署から預かった資料は、封筒に入れて小脇に抱えている。

営業部の部屋を覗くと、私を見て、にやりと笑った男性がいた。

「よっ、これはこれは副社長専属秘書に抜擢された、寿サンじゃあないですか？」